

中年女性の幻覚妄想状態 (第5報・まとめ)

—— ライフサイクルとジェンダーアイデンティティ ——

浅野 弘毅, 近藤 等

はじめに

われわれは、これまで、中年の女性に見られる幻覚妄想状態について、症例に即して検討を加えてきた。ここで、既報の概略をまとめておく。

退行期妄想症・性愛妄想・憑依体験を〔病前性格—発病状況—発病年齢—誘因—発症様態—病像—経過〕という一連のセットで捉え直してみると、それぞれの病態に際立った独自性の認められることが分かった¹⁻³⁾。

そのうち、病前性格および女性のライフサイクルにおける中年の危機に着目して再度整理を試みると図のようになる。

敏感性格者は、中年期に孤立状況で喪失体験をへて、被害妄想を主とする退行期妄想症になる。循

環気質者は、中年期に夫婦の危機状況で対人関係のつまづきを契機に、嫉妬妄想を主とする性愛妄想に陥る。ヒステリー性格者は、中年期に家庭内葛藤状況に心身の疲弊または暗示が加わると、憑依妄想を主とする憑依体験を呈する。

それぞれの病態に対する発病状況および誘因は、女性のライフサイクルにおける中年の危機の具体相を示している。そして、その基盤に、心理的にはジェンダーアイデンティティの危機、身体的には閉経にともなう内分泌の変化という共通項を見出すことができる。

なお、われわれが報告した症例は、いずれも中年の危機の乗り越えに失敗した患者であったが、窮地を脱して自己治療に成功した事例として女性教祖を補足的にとりあげた⁴⁾。

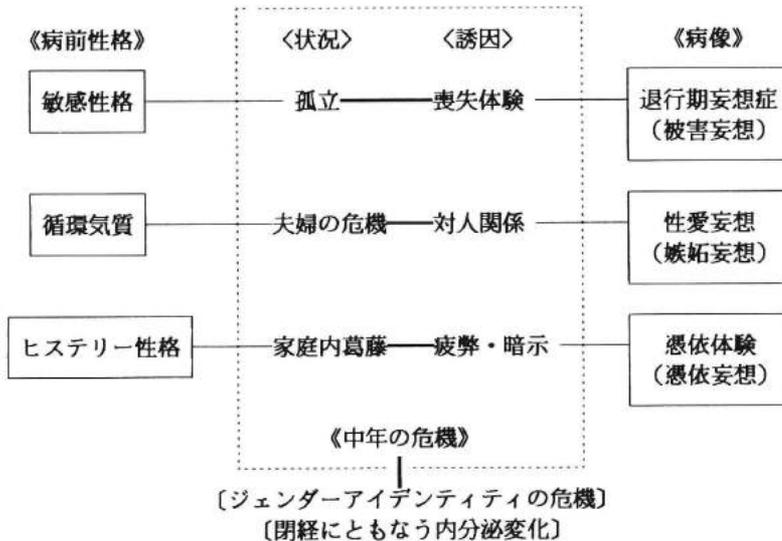


図. 病前性格と中年の危機

今回は、これまでの報告のまとめとして、症例の妄想がさし示している意味を解説するために、中年女性のジェンダーアイデンティティの危機について考察を加えてみたい。

妄想主題の意味

一般に「妄想」とは、「病的状態から発生する判断の誤謬であり、しかも単なる誤りと異なって、他人によって説得されてもその誤謬を訂正しえない誤った感情的確信」と定義されている⁵⁾。

Jaspers は、妄想の標識として、(1) 並々ならぬ確信、比類のない主観的確実性、(2) 経験や動かすべからざる推理によって影響を受けない、(3) 内容が不可能なものである、の3点をあげた。そして、妄想を2つに区別し、他の体験から発生的に了解可能なものを妄想様観念、心理学的に遡ることのできない究極的な体験を真正妄想と名づけた⁶⁾。

笠原によれば真正妄想の特徴はつぎのとおりである。(1) 平均人の確信に比しはるかに強い確信、比類のない主観的確信性。(2) 他人の合理的説得によっても、また自身の人生経験などに照らさせてみても、訂正不能である。(3) 内容に現実にはありえない側面を含む。(4) 例外的な場合を除いて、確信も内容も他者と共有されない。(5) 多少とも持続的であり、いわゆる妄想加工をともなう。(6) 原則として他の葛藤的体験から反応的に導きだされない。(7) 誤謬の成立を説明できる意識・知能・情緒の障害を背景にもたない⁷⁾。

他方、妄想様観念には以下のものが含まれるとされている⁸⁾。(1) 一定の気分の変化に基づく妄想。(2) 器質的脳疾患による痴呆や薬物による影響が妄想発生の条件になっているもの。(3) 作為体験・幻聴等の病的体験を説明するために発生した二次的妄想。(4) 適応困難な状態への反応として理解できる妄想。(5) 学習不能にもとづく誤った観念。

これらの分類に従えば、われわれの研究の対象は、葛藤的体験に対する反応としての妄想様観念ということになる。

Schneider は、真正妄想は一次的なものであつ

て、他の体験から導くことはできないとし、妄想を妄想知覚と妄想着想に分類した。そして、妄想様観念はわれわれに了解できるものであり、妄想知覚とは異なるので、異常体験反応と精神分裂病とのあいだには絶対的な区別が存すると述べている⁹⁾。

しかし、Huber らが示しているように、縦断的に観察すると妄想の確信性には変動が認められ、真正妄想の標識である絶対的確信と訂正不能性には動揺が認められる。したがって、真正妄想と妄想様観念の区別は必ずしも絶対的なものではないといえよう¹⁰⁾。

さて、妄想の研究には、その形式に関するものと内容に関するものとがある。さらに、内容についての研究は妄想の主題と妄想の対象の2つに分かたれる。もちろん、妄想はその非常識・非現実的な内容にあるのではなく、妄想の妄想たる所以は、それを導き出す根拠・合理的でない手続き・形式のなかにあることは言うまでもない¹¹⁾。

われわれの研究がめざしているのは、妄想の主題がどのようにして選択されるのかという問題である。

妄想の主題を性格—環境—体験という関連で説明しようとしたのは Kretschmer である。敏感関係妄想は、特異的な人格構造から妄想の主題を理解しようとする試みであった¹²⁾。

彼は、妄想を反応性の発展か分裂病の過程かと問うことは事実を単純化しすぎている、むしろ人格的姿勢の変化について内因因子と心因因子がどのくらい関与しているかを問うべきであると主張した。「人格基盤の地滑りによって培地の緩みが生じ、それに基づいて心因コンプレックスはさらに鬱蒼と幻想的に成長する」と彼は述べている¹³⁾。

現存在分析の立場から Binswanger は、妄想病者が、たとえわれわれとは違う世界ではあっても、やはりある妄想世界を生きており、深い絶望と苦悩に満ちた失墜をくりかえしながら、明証的な論理にもかかわらず真理から遠ざかっていく姿を記述した。そして、そこに働いている見えざる意図を「宿命論理」と名づけた¹⁴⁾。

Blankenburg は「妄想の人間学的諸問題」と題

する論文において、妄想病者では判断における絶対化能力と相対化能力の弁証法的な止揚が発動しないために、ある主題が絶対化し独立するとした。そのうえで、妄想の主題のなかには、病者の生活史の一回性が反映されていることを指摘している¹⁵⁾。

Kretschmer のあとを引き継いで、Baeyer は内因性精神病の発病に際して内因のみならず状況因が深く関わることを明らかにした。彼がいうところの状況因とは、病者をとりまく世界や対人的世界で出会うことがらが病者に対してもつ意味をさしている。したがって、外面的に類似した出来事でも、それを受け取る個人の性、年齢、性格、さらには生活史的条件下で異なることになる。状況因とは一方的に個人に働きかけるものではなく、個人と状況との関数なのである。「状況とは停止した生活史である」¹⁶⁾と彼は言う。

われわれの症例に見られた妄想を分裂病の妄想と比較すると、以下のような特徴が認められる。(1) 妄想の主題が生活史と状況から発生的に了解可能である。(2) 妄想に登場する他者は具体的な他者であって、超越的他者ではない。(3) 妄想が生活世界の全体をおおうことはなく、部分的な支配にとどまる。(4) 経過を通じて人格変化を認めない。

病前性格

精神医学的性格学の礎を築いた Klages によれば、性格には3様の意味があるという。第1は道徳的節度をさす倫理的意志の意味、第2は人格の意味、第3は生命の一体性ないしは個体の意味であるという。そのうえで、性格に6つの基幹概念を想定した。(1) 資性は、才能、能力などを含む個人的天分の総体であり、量的属性である。(2) 接合(Gefüge)は、意志発動の緩急を意味し、感情生起性、意志生起性、表現性能からなる比例属性である。(3) 動向は、性向あるいは感情的素地であって、方向属性である。さらに、以上3つの属性の相互関係、調和の程度を示す(4) 構築属性、および諸属性の結果の外観的な性格特徴である(5) 社会的効果属性と(6) 挙措の恒常的属

性、があるとした¹⁷⁾。

Kretschmer によれば、性格は、感情および意志面からみた、個々の人格の総体と定義される。そして、性格の基礎に、印象能力、保持能力、精神内部の活動性、伝導能力の4能力を想定し、この4能力が精神力を意味するとした。さらに、精神力の度合に応じて、強力性性格と無力性性格を区別した。その際、強力性を判定するのは、3つの尺度であるという。すなわち、(1) 性格が達しうる最大の感動の高さ(印象能力と結びついている)。(2) 感動の持続性(保持能力に応じる)。(3) 感情表出の度合(伝導能力に応じる)。このような分類方法に基づいて、彼は、(1) 原始性、(2) 発揚性、(3) 敏感性、(4) 無力性、の4つの性格類型を抽出した¹²⁾。

さらに、Kretschmer は、精神病と体格との相関関係を見だし、病前性格と体格との間にも相関があることを明らかにした。すなわち、分裂病の病前性格を分裂気質、躁うつ病の病前性格を循環気質と名づけ、それぞれが細長型体格および肥満型体格と相関しているとした¹⁸⁾。

先にも触れたように、性格と環境と体験の多次元的分析から妄想を理解しようとしたのが敏感関係妄想である。この場合の体験を出来事と取り違えてはいけぬ。「ある出来事がある人に影響を与えるか否か、またどのように影響するものであるかは、結局性格が決定する(ヴォルフガング・クレッチマー)」(*)からである。

Tellenbach は、Kretschmer の研究を高く評価してつぎのように述べている。「クレッチマーの分析は、状況—より適切には状況布置(Konstellation)—が精神病の病因論的原理として有している役割を、はじめて完全な明白さで示した。この状況布置は、特定の性格構造、環境と条件、特異的体験の3つによって規定される。この布置が妄想を生み、その主題を決定するのであるが、この妄想の形成には心因的成分と『過程的』成分との両者がからみあっている」「彼には、〈内因性の力動と心因反応性の力動との相互作用〉が、ある種の妄想病の経過にとっては《それを理解する唯一の可能性》であるように思われた」のであると¹⁹⁾。

Tellenbach 自身も、ノランコリーの分析を通して、どのような布置が内因性変化の病因にとって決定的な意味をもつかを攻究した。そして、前メランコリー状況として、インクルデンツ(封入性)とレマネンツ(負目性)を導きだした。そのうえで、メランコリー親和型性格の人は、その人なりの状況的契機をその人自身が構成するとした。こうした見方は、住まいや対人関係とくに家族の領域にも、職業の領域にもあてはまると述べている¹⁹⁾。

Baeyer も「人格は状況と密接に関係しているため、決して状況から出ることはできず、つねに状況の中でしか状況に反応しえない」と述べている¹⁶⁾。

病前性格論と状況論は、妄想病患者が、発病状況を構成し発病の契機となる体験を呼び寄せるのは、実は性格によることを明らかにした。このような観点に立てば、人生における危機は、外在的に襲ってくるのではなく、性格のうちに内在しているということになる。

ここで、われわれの症例に認められた性格について触れておこう。

敏感性格は、主として無力性であって、発揚性性格と純粋な無力性性格との中間に位置する。その特徴は、伝導能力の欠損すなわち心的放散能力の欠如である。代表例は、小心な倫理性と内面化された優しい感情を持つ、繊細で深く感じやすい人間である。控え目であるが、野心をもって努力し、社会的に有能である。

循環気質の特徴は、(1) 外交的、善良、親切、温厚、(2) 明朗、ユーモア、活発、激しやすい、(3) 寡黙、平静、陰鬱、気が弱い、の3つにある。そのうち、(1) は循環気質に共通する特徴であり、(2) は軽躁型の、(3) は抑うつ型の特徴を示している。循環気質の人間は、平均して社交的で親しみがあがり、現実主義的で適応性がある。循環気質の基本的特徴は、対人関係を重要視し、環境と融合・共鳴するところにある。

ヒステリー性格の本質は、自分に与えられた素質や生活可能性に甘んぜず、自分に向かっても、他人に向かっても事実自分がある以上のものを体験

しようとする欲求をもつところに存する。誇張性、演劇性、依存性、被暗示性、きまぐれなどが認められ、自己中心的であり、気分は不安定である。

(*)切替辰哉：精神医学的性格学。金原出版、東京、p. 35、1984. より引用。

ライフサイクル

ライフサイクルとは、出生・成長・成熟・老衰・死亡といった人間の一生のコースを、各発達段階で期待される課題と、その対応の過程で遭遇する危機のサイクルとして、捉えたものである²⁰⁾。

Levinson は、ライフサイクルには、基本的に2つの意味が含まれると述べている。すなわち、(1) 出発点(誕生、始まり)から終了点(死亡、終わり)までの過程または旅という考え方、(2) 一連の時期または段階に分けて捉える季節という考え方、である²¹⁾。

Erikson は、人間の全生涯にわたる発達段階の図式を、個体発達分化の図式(epigenetic schema)として描き出した。その際、成人期の心理・社会的危機として生殖と停滞を、また成熟期の危機として統合と絶望とを対概念として導き出した²²⁾。

Erikson のライフサイクルの発想は、フロイトの理論を拡張した形で、人生の後半の2段階を付け加えたものである。「人生半ばの過渡期」という考え方を初めて現代的な概念として明確にしたのは、ユングである。ユングは、人生を前半と後半に分けて、40歳前後をその分かれ目の時期とし、「人生の正午」と呼んだ。

河合によれば、ライフサイクルの考え方は、成人の問題を直線的に過去の出来事に結びつけ、原因-結果の連鎖から見ようとする態度に変更をもたらしたという。現在は過去も未来をも包摂しているという見方に、ライフサイクルの現代的な意義があると指摘している²³⁾。

さて、ライフサイクルにおける中年期の意味および更年期の心理については、第1報で詳しく考察したので、ここでは補足的に触れるだけにしたい。

先に引用した Levinson によれば、中年期にお

ける個性化の課題は、(1) 若さと老い、(2) 破壊と創造、(3) 男らしさと女らしさ、(4) 愛着と分離、という4つの両極性の対立を止揚することにあるという。「人生半ばの過渡期」には、生活構造がきわめて重要な変化を遂げる。人生半ばに、真の問題に直面しようとするのを妨げるのは、病的な不安と罪悪感、成人前期に解決されなかった依存心、敵意、虚しさなどである²¹⁾。

岡堂は、中年期の心理・社会的特徴を次のように要約した。(1) 成人初期から老年期への移行期であり、多くの心理的な問題が生じやすい。(2) アイデンティティの危機の時代であり、社会的な役割が変化して同一性の混乱が生じやすい。(3) 心身の健康にとって危険な時期である。(4) 社会的な達成の機会である。そのうえで、中年の専業主婦がかかえている心理的な問題の多くは、母親役割の修正と、新しい役割の取得にかかわるものであることを指摘した²⁴⁾。

ところで、女性の更年期は、身体的にも心理的にも最も活動的で有能な成熟期から、閉経および内分泌環境の変動を経ながら、心身の活力と機能が衰退する老年期への移行期である。身体的にも心理的にも重大な移り変わりの時期に当たり、精神的異常を生じやすく、人生の危機の1つである²⁵⁾。

安部は、更年期の症状は、閉経の時期に起こる身体的な変化だけでなく、心理的な変化も原因になっており、2つの原因は互いに影響しあっていると考えるべきであるという。そして、更年期症状と性別役割の考え方との関係についての調査を紹介している。それによれば、自分は女性らしいと強く思っている女性ほど、更年期症状も強いという興味深い結果が出ている²⁶⁾。

Korzeniowski は、退行期の精神病の病因として、内分泌の変化、中枢神経系および植物神経系の変化、過去の病気と個人の体質をあげ、加えて精神的外傷の重要性を強調した。心因のみによって精神病が引き起こされることはないが、性生活の抑制、死の恐怖、日常生活の些細な気苦労などが、他の要因と重なり合って精神病のひき金になるという。そして、病前の人格が精神病の病像に

影響すると述べている²⁷⁾。

最近、Pearce は文献を展望して、閉経と抑うつ症状との関係については必ずしも諸家の意見が一致していないこと、むしろ精神症状と関係しているのは、夫婦の不和や経済的問題などであって、子どもの巣立ちは関係ないこと、また死別などのストレスや身体的健康に精神症状は大いに左右されることなどを報告している²⁸⁾。

ジェンダーアイデンティティ

個人のライフサイクルに倣って、家族をひとつの有機体とみなし、その変遷をたどれば家族のライフサイクルが明らかになる。家族のライフサイクルは、(1) 結婚による新しい家族の成立、(2) 第1子の出生に始まる幼い子どもたちをもった家族、(3) 青春期の子どもをもった家族、(4) 子どもたちの離脱と出立、(5) 人生の晩年を送る家族、に分けられる²⁹⁾。

中年期は、子どもたちの離脱と出立の時期に該当し、親期から脱親期への移行期でもある。女性にとっては、閉経の時期でもあり、女性としてのジェンダーアイデンティティが危機に瀕し、再構築を迫られる時期である。

母役割から抜け出し、改めて女性としてのアイデンティティを確立しようとする際に、立ちほだかるのが、文化的に決定されたジェンダーである。ジェンダーは、生物学的性差に基づく「自然」であるかのように、社会組織と個人の生活史にくまなく張りめぐらされている³⁰⁾。したがって、個としてのアイデンティティの欲求は、「自然なもの」からの離反という感情をとめない、罪悪感やさまざまな葛藤を生むことになる³¹⁾。

ところで、落合によれば、近代家族はつぎのような特徴を有しているという。(1) 家内領域と公共領域の分離。(2) 家族成員相互の強い情緒的關係。(3) 子ども中心主義。(4) 男は公共領域・女は家内領域という性別分業。(5) 家族の集団性の強化。(6) 社交の衰退。(7) 非親族の排除。(8) 核家族³²⁾。

このうち、男は仕事(=生産労働)/女は家事(=再生産労働)という性別役割分業の思想を支えて

いるのは、家父長制と良妻賢母主義である。

家父長制とは、あらゆる社会に通底している女性抑圧のシステムである。

Boauvoirは「女は一度も男性という階級(caste)を相手にして、交換と契約の平等の上に立つ自分達の階級をつくったことがない」と述べている³³⁾。

Milletは、われわれの社会は、あらゆる歴史上の文明と同じく、家父長制社会であって、性による支配がわれわれの文化のもっともきわだったイデオロギーとして通用し、もっとも基本的な権力概念を与えているという³⁴⁾。

上野は「規範と権威を性と世代によって不均等に配分した権力関係を家父長制と定義した³⁵⁾。

また、瀬地山によれば、家父長制は「性に基づいて、権力が男性優位に配分され、かつ役割が固定的に配分されるような関係と規範の総体」と定義される³⁶⁾。

さて、家事労働は市場によって商品化されない労働の1つである。層としての女性の抑圧の物質的基盤は、女性が主婦として、生産労働から疎外され、再生産労働という不払い労働に従事させられるという2重の疎外のうちにある。「家族」とは家父長制的再生産関係の謂であるが、「家族」を通じて家父長制的再生産関係そのものが一ほかならぬ女性によって一再生産される。女性は女性から生まれた生きものを、自分を軽蔑するべく育てるのである³⁵⁾。

「母性」とは、子どもの成長を自分の幸福と見なす献身と自己犠牲を女性に憑憑することによって、女性が自分自身に対しては控え目な要求しかしないようにするためのイデオロギー装置である。

それまで主婦が黙って当然やってきた仕事が無当に押しつけられたものだという認識によって、女性はこの認識の以前には持たなかった「不全」感を持つようになった。文化のイデオロギー装置が効かなくなってはじめて、再生産という行為が「人間の自然」でもなんでもなく、文化のたぐらみの結果だったということが分かってくるのだ、と上野は述べる³⁵⁾。

瀬地山によれば、わが国における「主婦」誕生の源泉は、良妻賢母主義に求められるという。良妻賢母主義とは、中国の儒教の伝統などではなく、良質な国民の再生産のために、教育する母という形で西欧の女子教育観を取り入れ、さらに国家統合の必要から、国家にまで視野の広がった女性を要求するという、すぐれて近代的な女子教育なのである。そして、役割配分を支えるために、圧倒的に母性愛が強調され、夫婦愛が軽視されたのが、日本特有の近代家父長制である。男＝生産労働/女＝再生産労働という役割の配分を守る範囲において、お互いに深い感情の交流をせずすむというのが、日本の夫婦関係の特徴であり、だからこそ子どもは母親にとって自己実現と感情的交歓の対象になるのだという³⁶⁾。

良妻賢母思想の論理構造を、小山はつぎのように指摘している。(1) 男女は単なる生殖能力の相違にとどまらず、生理的にも心理的にも、果たすべき役割の面からみても、大きく異なる、いわば対極的な存在。(2) 国民として男女は平等とみなす、抽象的人間としての同等性。(3) 具体的人間としての第2次性。すなわち、女性は家庭においても、国家においても、男性に対して2次的存在であるとする。このような特徴をもつ良妻賢母思想は、社会の全般に生き続けている。たとえば「男女はそれぞれの性に依じて、仕事と家庭という役割を分担するのが『自然』であり、その役割が相補的であるがゆえに『対等』である」というようにである³⁷⁾。

大越は、日本のジェンダー・イデオロギーと天皇制との関係を論じてつぎのように述べる。家族が天皇制国家の基盤となる以上、その家族の実質的な担い手となる女性の教育が重視されるのは当然である。しかも、そこで女性は、私的感情を抑圧し、最も無能力な立場に転落することで、国家との一体化を実感するという倒錯した役割を演じることが要請された。ここに近代日本の良妻賢母教育の独特な点がある。「自らを否定する制度に一体化することでしか、突破口を見出せないところに、女を何重にも縛り付ける近代的ジェンダー・イデオロギーの陥穽があった」と彼女は言

う³⁸⁾。

女性が中年に至って、それまでの子育てから解放され、あらためて個人としての自由を模索しようとする時に、「内なる規範」として働き桎梏として作用するのが、近代以降のジェンダー・イデオロギーである。われわれの症例が中年期に挫折を余儀なくされた壁とは、ジェンダー・イデオロギーの壁そのものであったと言えよう。

おわりに

中年女性の幻覚妄想状態について、第1報から第4報までを総括し、中年期の女性が被害・性愛・憑依という妄想主題を選択して精神病状態になる意味について考察した。妄想の出現には、病前性格と状況とが深く関わっており、誘因は病者の人格そのものが招き寄せ、構成するものであることを見てきた。また、妄想の主題は生活史的に規定されることを確認した。

ライフサイクルのほかでもないこの時期に発症する理由について、中年期が身体的にも心理的にも重大な転換の時期であり、身体的には閉経にともなう内分泌の変化が起こり、心理的にはジェンダーアイデンティティの再編成が起こる時期であることを指摘した。

さらに、ジェンダーは社会文化的概念であり、近代以降のイデオロギー装置であることを、主にフェミニズムの視点を借りて論じた。ジェンダーを「自然なもの」とする発想は、女性自身の魂にも内在化されており「内なる規範」として作用するために、深大な葛藤を引き起こす。

われわれの症例に見られた、喪失の不安・所有と世間体へのこだわり・夫婦関係の危機と家庭内葛藤などが生じてくる背景に、家父長制と良妻賢母主義を基盤とするジェンダー・イデオロギーが横たわっている可能性について触れた。

文 献

- 1) 浅野弘毅 他：中年女性の幻覚妄想状態（第1報）—退行期妄想症再考—。仙台市立病院医誌 14：3-10, 1994
- 2) 浅野弘毅 他：中年女性の幻覚妄想状態（第2

報）—性愛を主題とする妄想—。仙台市立病院医誌 15：25-31, 1995

- 3) 浅野弘毅 他：中年女性の幻覚妄想状態（第3報）—憑依体験—。仙台市立病院医誌 16：25-31, 1996
- 4) 浅野弘毅 他：中年女性の幻覚妄想状態（第4報）—女性教祖の病跡から—。仙台市立病院医誌 17：9-15, 1997
- 5) 荻野恒一：妄想，異常心理学講座（第2次）10，精神病理学4（井村恒郎 他編），みすず書房，東京，p 185, 1965
- 6) Jaspers K：精神病理学総論（内村祐之 他訳）上，岩波書店，東京，1953
- 7) 笠原 嘉 他：妄想，現代精神医学体系 3A（懸田克躬 他編），中山書店，東京，p 233, 1979
- 8) 荻野恒一：妄想，異常心理学講座（第1次）第2部，精神病理学（D）分裂病心性その他の病理（2）（井村恒郎 他編），みすず書房，東京，p 1, 1954
- 9) Schneider K：臨床精神病理学序説（西丸四方訳），みすず書房，東京，1977
- 10) Huber G et al：妄想—分裂病妄想的記述現象学的研究—（木村 定訳），金剛出版，東京，1983
- 11) 村上靖彦：妄想，異常心理学講座（第3次）VI，神経症と精神病3（土居健郎 他編），みすず書房，東京，p 55, 1990
- 12) Kretschmer E：敏感関係妄想—パラノイア問題と精神医学的性格研究への寄与—（切替辰哉訳），文光堂，東京，1961
- 13) Kretschmer E：精神医学論集（湯沢千尋訳），みすず書房，東京，1991
- 14) Binswanger L：妄想（宮本忠雄 他訳），みすず書房，東京，1990
- 15) Blankenburg W：妄想の人間学的諸問題，妄想（Schulte W et al 編，飯田 真 他訳），医学書院，東京，p 57, 1978
- 16) Baeyer W：妄想の現象学（大橋正和 他訳），金剛出版，東京，1994
- 17) Klages L：性格学の基礎（赤田豊治訳），うぶすな書院，東京，1991
- 18) Kretschmer E：体格と性格—体質の問題および気質の学説によせる研究—（相場 均訳），文光堂，東京，1960
- 19) Tellenbach H：メランコリー（木村 敏訳），みすず書房，東京，1978
- 20) 村瀬嘉代子：家族のライフサイクル—変わるもの，変わらざるもの—。シリーズ変貌する家族5，家族の解体と再生（上野千鶴子 他編），岩波書店，東京，p 23, 1991

- 21) Levinson DL: 人生の四季—中年をいかに生きるか— (南博訳), 講談社, 東京, 1980
- 22) Erikson EH: 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル— (小此木啓吾訳), 誠信書房, 東京, 1973
- 23) 河合隼雄: 概説. 精神の科学 6, ライフサイクル (飯田 真 他編), 岩波書店, 東京, p 1, 1983
- 24) 岡堂哲雄: 熟年=中高齢の心理と危機. 現代のエスプリ, 192号, 至文堂, 東京, p 5, 1983
- 25) 西村敏雄 他: 更年期・心身の変化. 更年期障害 (鈴木雅洲 他編), 医学書院, 東京, p 24, 1974
- 26) 安部徹良: 更年期であるということ. 学陽書房, 東京, 1994
- 27) Korzeniowski L: Sur l'étiologie et la pathogenese des psychoses dites «involutives». Ann Méd-Psychol 122: 595-598, 1964
- 28) Pearce J et al: Psychological and sexual symptoms associated with the menopause and the effects of hormone replacement therapy. Brit J Psychiatry 167: 163-173, 1995
- 29) 小此木啓吾: 家族ライフサイクルとパーソナリティー発達の病理. 講座家族精神医学 3. ライフサイクルと家族の病理 (加藤正明 他編), 弘文堂, 東京, p 1, 1982
- 30) Buytendijk J: 女性—自然, 現象, 実存— (大橋博司 他訳), みすず書房, 東京, 1977
- 31) 波田あい子: 女性の不安. 日本のフェミニズム ③ 性役割 (井上輝子 他編), 岩波書店, 東京, p 152, 1995
- 32) 落合恵美子: 近代家族とフェミニズム. 勁草書房, 東京, 1989
- 33) Beauvoir S: 第2の性 (II) 女はどう生きるか (生島遼一訳), 新潮社, 東京, 1959
- 34) Millett K: 性の政治学 (藤枝滯子 他訳), ドメス出版, 東京, 1985
- 35) 上野千鶴子: 家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平—. 岩波書店, 東京, 1990
- 36) 瀬地山角: 東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会学—. 勁草書房, 東京, 1996
- 37) 小山静子: 良妻賢母という規範. 勁草書房, 東京, 1991
- 38) 大越愛子: 近代日本のジェンダー—現代日本の思想的課題を問う—. 三一書房, 東京, 1997